

レイラのピアノ

それは古代か未来か分からない何処かの国の、娘と青年が起こした奇跡が紡いだ、悲しく美しい物語。

娘は青年を愛していた。青年は娘を愛していた。

娘はレイラ、青年はカイトといった。カイトはピアノが得意だった。レイラはそんなカイトに憧れ、一生懸命ピアノを練習した。

そんなある日、戦が二人を引き裂いた。

戦場に旅立つカイトに、レイラは約束した。

「あなたが帰ってくるまでに、この曲を弾けるようになって待っていますね」

それは、古くから伝わる美しい曲。悲し気な旋律が、レイラは幼い頃から大好きだった。

そして、カイトは戦場へ行った。

娘のために、とにかく生きて帰ろうと必死に耐え抜いた。

レイラの家近くにも、敵国の襲撃があった。レイラはすんでのところ命は助かったが、落とされた爆弾で、右手首から先を失ってしまった。

カイトは戦場から帰ってきたが、レイラは死んだと聞かされた。

途方に暮れたカイトだったが、やがて結婚し、子孫を残した。

そして長い月日が過ぎた。

ピアノが好きなカイトの孫のフィオは、祖父が大好きだった。

祖父カイトは、フィオにあの曲を教えた。娘との約束の曲だった。

やがて、カイトはフィオが曲を完璧に弾くのを見届けると、息を引き取った。

フィオが成長して二十歳になった時、小型のピアノを自ら町の広場に運び演奏する、ピアノ弾きになった。

ある日、あの曲を弾いていると、かつて娘であった老女レイラがそこを通りかかり、曲に聴き入った。

それから毎日毎日、レイラは聴きにきた。

そして次第にフィオと、言葉を交わすようになった。

あの曲に込めた思い出、カイトとの約束、右手首を失くしてカイトと会えなくなったこと。

フィオが、まず気づいた。

「祖父は、あなたが何処かで生きていると信じて、僕がいつかこの曲を貴方に聴かせられるために、熱心に教えてくれたんだと思います」

「まあ、あなた、あの人の孫なのね？」

「良かったら、一緒にこの曲を連弾しませんか？」

「あら、左手だけで大丈夫かしら？」

「大丈夫。僕が右手部分を弾きます」

長いこと大好きだったピアノを避けてきたレイラは、少し戸惑ったが、フィオの言葉に応じた。

二人がピアノを連弾で奏で出すと、音は少しぎこちなかったが、レイラの心に、一気にカイトとの思い出が、蘇って来た。

ピアノの楽しさを教えてくれたカイト。少し照れながら野の花の花束をプレゼントしてくれたカイト。

初めてのデートで初めてのカフェに行き、コーヒーにむせて大笑いしたカイト。
戦場に赴く前の晩、ぎゅっと抱きしめてくれたカイト。

いつしか晴天の空から、やさしい天気雨が降り、色鮮やかな虹が出ていた。
カイトの、レイラとフィオへの合図かのように。